

8月のクリスマス

2004(平成16)年12月11日鑑賞(OS劇場C・A・P)



第2章

やっぱり楽しいのが一番!

監督=ホ・ジノ/出演=ハン・ソッキュ/シム・ウナ/チョン・ミソン (パンドラ配給/1998年韓国映画/96分)

……『シュリ』(99年)、『二重スパイ』(03年)での熱演が強く印象に残る韓国の大スター、ハン・ソッキュが、若くみずみずしい女性との心の交流の中で、死と直面しながら静かに過ぎていく人生を淡々と描いた作品。1998年に多数の映画賞を獲得したこの作品は、その後の韓流ドラマの元祖となったものだが、私には淡々としすぎて、少し物足りなく思えたが……。

ハン・ソッキュ、日本初の公開主演映画

主演作が必ず大ヒットすることから、「興行の保証手形」の異名をとるのが、韓国映画のトップスター、ハン・ソッキュ。1964年生まれだから既に40歳になるが、『シュリ』(99年)、『二重スパイ』(03年)での熱演は特筆モノで、日本での昨今の韓国映画ブームに大きく寄与したことは周知の事実。このハン・ソッキュが主演した映画で、日本で初公開されたのが1998年のこの『8月のクリスマス』とのこと。意外な感じもあるが、日本でのハン・ソッキュ人気も、最近のものなのだと再認識……。

かなりもどかしい(?)純愛ドラマ……?

ホ・ジノ監督のデビュー作であるこの『8月のクリスマス』は、1998年の韓国の第19回青龍映画祭で最優秀作品賞などを受賞したとのこと。そして、その後次々と続くことになった韓流純愛ドラマの1つの典型となったものだが、この映画での純愛はかなりもどかしい(?)。なぜなら、病気で死を目前に控えていることを自覚している主人公のジョンウォン(ハン・ソッキュ)は、駐車取り締ま

りの仕事に従事している若い女性タリム（シム・ウナ）との心の交流には十分満足しているものの、それ以上、愛の表現や男女間の性の欲望などを全く見せず、タリムからのアプローチを淡々と受け止めているだけだから。これは、当然ジョンウォンのタリムに対する誠意と愛情の表れなのだが、若いタリムにとっては、ジョンウォンが自分の気持ちをきちんと受け止めてくれないことはかなり苦しいはず。そんな視点でこの映画を観ていると、かなりもどかしい気持ちが……。もっともこんな私があまりに慌てすぎて、恋に結果を求めすぎているのかも……？

2人の心の交流は……？

主人公のジョンウォンはソウルの街の中にある小さな写真館のオーナー。結構メカにも強そうで、仕事ぶりも真面目。しかし他に店員はおらず、自分で店番をしながら淡々と日々の仕事をこなしているだけで、事業拡大欲などは全くない様子。子供たちからの注文や、おばあさんからの注文にも丁寧に対応している、いかにも人のいい経営者。そんなジョンウォンがタリムと知り合うことになったのは、タリムが近所で駐車違反の取り締まりをしている関係上、急ぎの現像などの注文を持ち込んでくるようになったため。

暑い韓国の夏

映画の冒頭は暑い夏。韓国は日本より北に位置しているから冬は寒いものの、やはり夏は暑い。暑期中、制服を着て路上に立って取り締まりをする仕事は結構ハードだから、ちょっとした骨休みを兼ねて、タリムは時々お店の中に。そして彼女にとって、この店の中でのジョンウォンとのたわいない会話が心の安らぎとなっていくのに、多くの時間は要しなかった。彼女の心が安らぐ理由は、言うまでもなくジョンウォンの対応のやさしさ。何を言っても笑顔でタリムの願いを聞いてくれるジョンウォンの存在は、日々の仕事に追われギスギスした生活を続けている若い彼女にとって何事にも替え難い貴重なものになっていったわけだ。こんな2人の会話を手助けするのによく登場する小道具がアイスクリーム。「夏は嫌い！」と断言し、「おじさん、おじさん！」と呼んで、若い女性特有の弾けた口調で話しかけてくるタリムの行動は、一見無遠慮で厚かましいものだが、逆

にそのことがジョンウォンにとっては新鮮なものとなり、ジョンウォンも次第にタリムの訪問を心待ちにするようになっていった。もっとも、こんな2人の心の交流が長く続くことは所詮かなわないことだったが……。

シャレたタイトル

暑い夏が終わり季節は移り変わっていったが、そんな時間の経過とともにジョンウォンの体調は次第に悪化し、ついに入院することに……。そうなると1人で経営していた写真館は当然閉められたままとなるから、タリムが以前のようにここを訪れても誰も彼女を迎えてくれない。そんなくり返しの中、勤務地が変更となった彼女は写真館の中に1通の手紙を差し入れた……。いったん写真館に戻ってきてタリムの手紙を読んだジョンウォンだったが、再び病状が悪化し病院へ。

季節はすでにクリスマスとなっていた。そんなクリスマスイブの日、写真館を訪れたタリムが写真館の陳列棚で見たものは……。2人にとってのクリスマスは12月ではなく、あの暑いソウルの8月にあったことをタリムはあらためて感じるのだった。この映画のラストシーンを観て、『8月のクリスマス』とは何ともオシャレでセンスのいいタイトルだと感心！

ハン・ソッキュのやさしい顔にビックリ

『シュリ』や『二重スパイ』での「熱演」に比べれば、この『8月のクリスマス』でのハン・ソッキュの表情や演技はホントに静かで抑えたもの。死と直面していながらも、それを周りには全く見せず1人胸の中に。そしてタリムから示される愛情を淡々と受け止めるだけで自分がもつタリムへの愛情についてはすべて封印(?)し、その日その日を精一杯楽しみながら静かに人生の最後に向けて……。俺にはとてもこんな生き方はできない。そんなに我慢せず、もっと絶叫したり不平不満をぶちまけたらいいのに……と思うのだが、ジョンウォンは死までの時間を淡々と……。こんな主人公を演ずるハン・ソッキュは、かなり度のきつい(?)メガネをかけて、『シュリ』『二重スパイ』とは全く違うやさしい表情を見せる。これを観ているとさまざまな役柄を見事に演じ分ける俳優の演技力にホトホト感心！

2004(平成16)年12月11日記